

臨江仙 夜歸臨皋

夜 臨皋に帰る

元豊五年四十七歳（一〇八二年）

夜飲東坡醒復醉

夜東坡に飲み醒めて復た酔う

歸來髣髴三更

帰り来たれば髣髴として三更

家童鼻息已雷鳴

家童の鼻息已に雷鳴

敲門都不應

門を敲けども都て応えず

倚杖聽江聲

杖に倚りて江声を聴く

長恨此身非我有

長に恨む此の身の我が有に非ざるを

何時忘却營營

何れの時にか營々たるを忘却せん

夜闌風靜縠紋平

夜闌けて風静まり縠紋平かなり

小舟從此逝

小舟此より逝きて

江海寄餘生

江海に余生を寄せん

臨江仙は詞の曲牌の名。双調、前段後段同形。二三・五句、平声庚韻。

臨皋亭は黄州の町から南へ一里、長江に臨んで建っていた。

【語句】髣髴：似ているさま。都不應：都は口語的なことば。ここは否定を強めている。

營營：名利の追及に齷齪する。夜闌：夜真つ盛り。

この詞の最後の二句から東坡出奔の噂がたち黄州の知事は、州が預かった罪人を逃がしたと青くなり慌てて、臨皋亭に駆けつけてみると、東坡は高軒をかいて寝ていたと言う。しかし噂は神宗にまで聞こえ疑われた。この詞の中で思うように生きられない自分の不自由さをかこっている。本来自由人である東坡にとって、監視される罪人としての暮らしは辛かったことであろう。

夜、東坡で酒を飲み。醒めてはまた酔い、

臨皋亭へ帰って来たたら、夜中の十二時頃のようなだ。

使用人のいびきは、もう雷のように鳴り響き、

戸をたたいても、いっこうに返事をしない。

杖によりかかり、長江の音を聞く。

つらつら思うに、自分自身

が、自分のものではないとは、何とうらめしいことか。

いったい、いつになったらあ

くせくすることを忘れられるの

のだろう。

夜はふけゆき、風も静まり長江の水面も波が消え平らにな

った。いっそ小舟に乗り、

ここから漕ぎでし、広い大海原に余生を送ろうか。